

ドイツの教育研究の現況

— 1994年の研究者訪問と学会参加からみた —

宮崎 俊明

(1996年10月15日 受理)

Trends in der erziehungswissenschaftlichen Forschung in Deutschland
— Einige Betrachtungen aufgrund von Fachgesprächen und Tagungen in 1994 —

Toshiaki MIYAZAKI

も く じ

はしがき — 研究滞在の概略 —

I. 研究者訪問

- 1 : ブランシュヴァイク工業大学とホーフ — 地方大学の自力と魅力 —
- 2 : ベルリン — パラダイムのるつぼ — ; 2 1 : ベルリン工業大学とヘンドリックス — 教育研究の学・産・官の融合 — ; 2 2 : 自由ベルリン大学 — ヴルフ, レンツェン — ポスト構造主義の拡充と変容 — ; 2 3 : フンボルト大学のベンナー — ドイツ教育学の再構築へ —
- 3 : 旧東独大学の新生 — 旧西独からの新教授たち — ; 3 1 : ポツダム大学のシュミット — 新教育の教育史 — 3 2 : マグデブルク大学のマロツキ — 教育哲学と教育的伝記研究 — 3 3 : イエナ大学のフリートリヒ — ベスタロッチの CD-ROM テキストと最近スイスでの研究
- 4 : 転換に直面した旧東独の教育研究者たち — ドイツ民主共和国教育学アカデミーのゆくえ — ; 4 1 : フンボルト大学のアイヒラー — シジフォスの石 — 4 2 : K教授 — 抵抗か弁護か — 4 3 : ブランデンブルク州立教育研究所のエッガース — 過去のない若手の事例 — 4 4 : 「科学フォーラム：教育と社会」 — 過去の残像と転進の試み — 4 5 : 教育学アカデミー (APW) 元総裁ノイナー — 自己批判と自己主張 — (インタビュー)
- 5 : シュールプフォルタ校 — 伝統的名門ギムナジウムとニーチェ —

II. 学会・会議参加

- 1 : マグデブルク大学教育史・比較教育学講座 国際コロキウム：「伝統と革新の間の社会転換期の教育学」 — 東欧と西欧の仲介点としてのマグデブルク —
- 2 : ドイツ教育学会教育人間学研究会秋季大会「アイステーシス・エステティーク [知覚と美的感覚]」 — 教育学の審美的転回 —
- 3 : ドイツ教育学会教育哲学学会秋季大会「形成の哲学」 — ポスト・モダンの教育哲学 —
- 4 : ドイツ教育学会幼児期教育学会秋季大会「こども研究 — 現代の人間学, 教育学, 社会化の諸理論からみたこども研究 —」 — 新旧両ドイツの研究の断面 —

- 5 : ドイツ教育学会 (DGfE) 系秋季3大会の総会 - 学会組織の形成とテーマ決定 -
- 6 : ポツダム大学教育史講座 「レカールの教師ブルンスの没後200年記念研究コロッキウム」 - 教育史研究大会と地域との連携 -
- 7 : ベルリン日本文化センター 国際シンポジウム「学習文化の構築 - 日本の幼児期の比較展望 -」 - 教育の国際評価の戦略と視点 -
- 8 : ドイツ生活救済連合精神障害部門シンポジウム「ドイツ語で話す... - 外国籍の精神障害の子とその親のためのマールブルク対話集会」 - 教育運動の最前線 -
- 9 : ドイツ青少年研究所「転換するヨーロッパ - 家族はいま? - 親の態度の東欧・西欧比較 -」 - 研究のヨーロッパ的視座と大学外広域化 -

はしがき - 研究滞在の概略 -

1994年6月から11月まで、ドイツ学術交流会 (DAAD) の招待外国人研究者になったのを機に6ヵ月間ドイツに研究滞在をした。このような比較的長い期間は、主としてマールブルクにいた82~83年の DAAD と88年の文部省の場合に続き3度目だが、89年のベルリンの壁崩壊後では初めてだった。研究計画としてはここ数年来のとりくみの補充や展開のため次のように設定した。1) ペスタロッチの読書ノート研究 (拙著 Pestalozzi und seine Lektüre, 1992) の補充と1996年1月のスイスでのペスタロッチ生誕250年シンポジウムでの招待発表の準備 2) 旧東独教育の後退と変貌 (拙論「東ドイツ教育の終焉 I~III」鹿児島大学教育学部研究紀要 42, 1990, 44, 1992) のための資料収集と関係者・機関訪問 3) 現代ドイツ教育理論の動向把握 4) ドイツの学校建築論調査 (拙論 Schulbau und Schubaudiskussion in Japan, in : Bildung und Erziehung, 1994/1) 5) 大学入学前の高校生意識の日独比較 (拙論「進学準備下の高校生と学校」鹿児島大学教育学部研究紀要 45, 1993)。このうち4)は行政当局からの資料収集の限界のため中断、5)はドイツ教育学会 (DGfE) の「倫理コード」でもいうように、いわゆるデータ保護の問題があり、たとえば学習ストレスのアンケート調査には、生徒、担任教員、校長、行政当局、親の会の承認も要し、実施は不可能でないが、短期間では容易でない、というクラフキ (W.Klafki, 以下、すべて敬称略) の助言で滞在中の実施は取り止めた。

まず、2回3週間をホーフ (D. Hoof) のいるブランシュヴァイク工業大学に滞在、あわせてその近郊のヴォルヘンビュテル・アウグスト公園図書館などを利用した。次のベルリン滞在中は、その地区の大学や研究機関の共同ゲスト・ハウスで、78世帯分、年間40~50か国、800~1,000人が利用するという「ベルリン国際科学出合いセンター」 (Internationales Begegnungszentrum der Wissenschaften Berlin) に約4ヵ月間入居、ベルリン工業大学、自由ベルリン大学、フンボルト大学、ポツダム大学、旧ドイツ民主共和国教育学アカデミー (APW) の資料・蔵書をもとに94年3月に開館された教育史研究図書館 (BBF) などに通った。最終滞在地マールブルクでは学会シーズンのため半分以上を留守にしていた。また、7月中旬にはイエナ大学のハウスに1週間留まった。

なお、その一年余り後の96年1月には文部省国際研究集会派遣研究員としてチューリヒに10日間

宮崎：ドイツの教育研究の現況

滞在、さらに同年5月から6月にかけて中部ドイツのニーダーザクセン州文部省の招待研究者として同州のヒルデスハイムとブランシュヴァイク、ベルリン、マールブルクに3週間の研究旅行をした。スイスの場合は、ペスタロッチ生誕250年シンポジウムでの「ペスタロッチの民俗的関心」¹⁾の発表と、番外コロキウムでの「アジア圏のペスタロッチ」の小報告のためであった。旧知、新顔との出会いを喜びながらも、研究の手法、レベル、ペスタロッチの評価と受容でのスイス・ドイツ間の差、日本のペスタロッチ研究の経過と現状に思いを致した。ドイツでの場合は、初開催の“EXPO 2000”に向けた教育のテーマ・パークに設定されたフォルクスワーゲン社経営コミュニケーションセンターでの会議に招待され、そのセッション「世界の教育風景」にアフリカのカメルーンからの文化研究者、ロシアの教育アカデミーの事務局長、アメリカのヘッド・スタート協会の会長、パリからのユネスコ代表に交じって、日本からも報告するためだった²⁾。

このふたつを合わせると、ドイツ教育学会(DGfE)系の秋季大会3つ、比較教育・教育史関係の臨時的記念大会3つ、それに幼・少年期、障害者、家族問題、メディア関係の国際集会4つの、あわせて10の学会ないし会議に出席したことになる。ただ、この10のうち参加者リストには名はあるが、発表は2件であった。また、ここ10~15年来の会員であるドイツ教育学会、同教育史学会、ドイツ18世紀研究学会の3つの定期大会には滞在時期や日程の都合で出席できなかった。なお、これらの場で日本以外でアジアからの参加者はチューリヒのペスタロッチ・コロキウムのみ、日本からの発表者ないし参加者がいたのはベルリンの日独教育比較シンポジウムのみであり、ペスタロッチ・シンポジウムは発表者以外にはいなかった。

所期の目的のためには研究者訪問にも努めた。94年の約30人のうち約20人には2回以上会ったが、なかでも世話になったり刺激的だったのは、旧知ではブランシュヴァイクのホーフ、ベルリンの W. Hendricks, Ch. Wulf, D. Lenzen, J. Schiller, ポツダム大学の H. Schmitt, ゲッチンゲン大学の Ch. Rittelmeyer, イエナ大学の L. Friedrich, ニュルンベルク大学の M. Liedtke, マールブルク大学のクラフキ, H. Stübiger, B. Willmann らである。手紙では旧知ながらはじめて訪問したのは上のフリートリヒ、マグデブルク大学の、教育哲学会の W. Marotzki, R. Golz であり、この3人とも2回以上会った。旧東独の研究者には W. Eichler ほかの数人にそれぞれ複数回会った。一度きりだったのが、ドイツ教育学会の前会長でフンボルト大学の D. Benner, ブランシュヴァイク工業大学の H. Kiper である。なかでも東独教育学アカデミー元の総裁 G. Neuner は興味深く、最近ようやくその面談の録音を起こし22枚の原稿化をおえた。

96年の冬のスイスにおけるペスタロッチ・シンポジウムでは、28人の招待発表者のほとんどが同じホテルに投宿し、旧知やその名を論著で知る人との出会いがもてた。これに対し、初夏のドイツの場合では、たしかに参加者も、会場も、テーマも学会大会とは違ってことごとくが新しく、その運営の見事さや気配りはかえって通常の学会大会よりもくつろげ、印象深く成果はあったと思う。そして会議後は再会という形でマグデブルク大学にゴルツ、フンボルト大学に H.E. Tenorth を、

ベルリン工業大学に W.-D. Greinert を、また、初めてヒルデスハイム大学に E. Cloer を訪ねた。ここ3回の渡航機会でも2回会えたのはフリートリヒ、ヘンドリックス、テノルト、3回とも会っているのはホーフ、スチュービヒ、それにベルリンの教育史研究図書館の実質的な館長ビーアヴァーゲン (M. Bierwagen) だが、これらはおのずから以下本稿の内容やわく組とも重なる。

また、わずか1~3回ながら、先方の誘いやこちらの希望で次の大学の授業に出る機会があった。ブランシュヴァイクで1種(ホーフ)、ベルリンで2大学4種(自由大学のドリンクとハーシュ；工業大学のヘンドリックスとグライネルト)、マールブルクで1種(クラフキ)である。ほかにブランシュヴァイクでの学生の教育実習授業(ホーフ)、旧東独地区の教員研修ゼミナール(シラー)、チューリヒの小学校での通常の授業を各1回参観した。

大学ハウスでの暮らしは、現地の市民社会と距離のある居住区(ゲッター)、コロニーになる面なしとしないが、経費、家事・掃除、転居などの利便さ、なにより言語、文化、国籍、専門分野などの違う研究者やその家族と日常的に会える楽しさがある。ベルリンでは単身だった1ヵ月間、モスクワとリトアニアからきた核物理と機械工学のひとと同室、さらにそこにインドの物理学教授も加わり、寝室以外を共同利用した。近時のドイツの学術政策と外国人研究者の本国事情の反映か、宿舎でも中国と旧ソ連からのひとが多数派になった。マールブルクのハウスでは今回はじめて韓国からのひとに出会った意味も大きい。アジア系のひとたちはともかく元気がいい。しかし、ドイツの学術政策や市民権と外国研究者の本国事情との間に断層もある。あるとき、ドイツ側が招待した中国人研究者に滞在期間をめぐって中国側在外交館の「介入」があったとしてドイツ連邦議会で問題化された新聞報道を読んだが、事実、似たような場面をみたりもした³⁾。

一方、「国際化」や経済的な豊かさで近年とみにふえている日本からの中・高年研究者のなかには途中で帰国したり、神経疲労を示したひとの噂や現実は一、三にとどまらなかった。生活・研究環境やことばなど一定程度の条件を欠くために困窮し、ついには自国への屈折した「自信」や他国への「反感」すら生みかねない。こちらは身分といえば、日本で重みのあるものとされる文部省在外研究員でも先方の客員教授でもない一研修者であり、一応はむこうの「ゲスト」だが、むしろドイツ人研究者がいう「研究旅行者」であった。出張や派遣が個人研修などに優先するとみるわが国の尺度はこの地では必ずしも通用しない。自己反省をこめていえるのだが、高齢化する文部省在外研究員や所属大学の「格」よりはそれと関係のうすい若手研究者や有能な女性などが外国でめだつ日本人となる現実を直視すべきだろう。また、妻と4ヵ月、そのうち大学生の二人の娘とも2ヵ月ともにいたが、このように単身でない方が信頼されるし、つきあいの輪もひろがる。3つの学会大会には妻も教育学関心者として同行した。

滞在中の便宜と効率は、4ヵ所のゲスト・ハウスにもよるが、売り手と買い手とが集まる青空市で入手した中古のクルマ、備え付けのデンワ、もってきたワープロのためでもあった。この3つ、つまりスピードとアポイントメントとレターがもつ効率、拘束、責任の度合いの高さはセットだか

宮崎：ドイツの教育研究の現況

らである。ただ、クルマでは駐車場や駅で警官の検問を数回受けたが、すべてが旧東独の地方であったのは、かつて統一前に後部座席まで開けさせられたほどでなくてもむこうの職務心性やこちらの外国国籍、加えて治安問題のせいだったかもしれない。それに事故もともなう。西の田舎道でこちらが先方の割り込み違反車に追突、幸い、双方に人身に傷害はなくこちらは廃車にしたが、そのさい、警察、保険会社、自動車工場の公正かつ迅速な処理には感心した。

以下では上の学会・会議への参加と研究者訪問をとおしてみた教育研究の主題動向や問題の所在を日本の教育学や、教育の外国受容や国際化を念頭において整理してみたい。ただ、96年のペスタロッチ記念の教育史関係とドイツ万博のメディア関係の大会の2件は、前者は4月に刊行済み、後者も原稿も提出済みである。これらにはなにより関心の大きさもあり、本稿では多くをふれず、詳細は別の機会を期したい。なお、本稿は、「教育学研究」に84年と87年に掲載された拙稿2編とその視点を共通にしている⁹⁾。

I. 研究者訪問

1：ブランシュヴァイク工業大学とホーフ —地方大学の自力と魅力—

5月31日にブランシュヴァイクに入った翌日、ホーフの教室の研究スタッフ、研究・教育補助員、秘書など10人が、学科図書室に花、ワイン、サンドイッチ、ケーキをもちよってきた。かれの後継として今学期から授業をはじめた女性教授キパーの40歳誕生日とわたしの研究滞在とをかねての集まりである。彼女には花束が贈られ、わたしには鍵が貸与された。これは研究室、図書室、ガレージ用の鍵であり、夜間や休日にも自由に出入りできるためのユーモアと実質をこめた「セレモニー」だった。

88年にホーフ宅に5日間泊込んでペスタロッチの読書ノートに関する文字どおり拙稿の校閲を受けて以来かれに会う機会はなかった。その間それぞれ、6, 70通近い手紙のやりとりをしてきた。ドイツ式に用件をストレートに書き出しながら、そのあとは社会、家族、学校、学会などのトピックスや噂、それに個人的な旅行や趣味に触れる。かれの分量は通常は1枚、いまはパソコンだが、つい2年前まではオリベッティのポータブル・タイプでユーモアや辛辣さをこめてぎっしりうってきた。切手ひとつとっても、数年前には、ニュルンベルグ大学の学校博物館で教育テーマの切手展示をしたほどの玄人はだしである。こちらはひどいドイツ語を書いているのだが、われわれはドイツ的で18世紀的な手紙文化を共有しているつもりである。

ペスタロッチの読書ノートに関するこちらの研究は、ホーフが編者である「ブランシュヴァイク学校教育学叢書」の第9巻に入れられることになったが、まだファックスのゆとりもなく4年がかりで92年に刊行された。いわれる国際化のなかでも彼我の差のあまりの大きさをしばしば感じさせられてきた。この仕事は、82～3年のドイツとスイスに滞在中、まず今は亡きボンのデルボラフがこちらを半世紀にわたる全集と書簡集の校閲者デュング (E. Dejung) やチューリヒ大学などスイ

ス側へ紹介, 続いてマールブルクのクラフキによるDFG(ドイツ学術振興会)の研究費助成の導入でスタートした。その後ようやく文部省科学研究の採択となった。幸運だったのは、この基礎的でありに特殊な内容の一部をドイツ語化した文章がホーフの目にとまったことである。かれがもつペスタロッチ研究の専門知識, その教室にいるコンピューター出版の精通者, 校正要員, さらには連絡事務一般の秘書など, かなり強い背景で出版が可能になった。とりわけ, ナウク(J. Nauck)のような中年の助手層のなかには能力と経験を兼備したひとがいるのは, マールブルクやマグデブルクでも共通である。400頁の小著は, 自己負担金はなし, 図書館献本は自由など測り知れぬ恩恵をうけて日の目をみた。もちろん原稿料などには無縁だが, せめて校正への謝金支出をと勤務校の個人わりあて研究費のわくからの支出を申請してみた。40年近くまえの料金マニュアルを使う係長は「自分たちは国家に損失を与えないように職務に専念しています」といった。これが前例に忠実な, 国をまたぐ研究費処理の意識であった。

付言すれば, 小著の書評はドイツの「教育学雑誌」(Zeitschrift für Pädagogik, 1993/6, S. 1030~1033)でスイス人(D. Tröhler)から, ベルギーの「教育史」(Paedagogica Historica, 1993/1, S. 324~326)でフランス人(M. Soëtard)からえたが, 日本での場合, 「教育学研究」からは異例の「自著紹介」という紙面提供をいわれそれに応じた⁶⁾。文献リストはともかく, 最近もっとも意欲的に発表しているオスタワルダー(F. Osterwalder)がその論旨の展開に本文に「長年苦心の作」として小著の資料的部分を使っていた⁶⁾。また, 当時国際教育史学会の会長の位置にあったデパーペ(M. Depaepe)がペスタロッチからみた教育史記述の方法論を展開したとき, ある段落で小著がパラダイム変容に時代のジャーナリズムの影響を主張した部分を取りあげていた。

ケルン出身のホーフの, ボン大学での主専攻は歴史, ギリシア考古学だった。このためかれの処女作は, ドイツ中部の一地区の新石器-青銅期の石斧調査をした350頁の大著である。戦後の困窮期にギリシャを研究旅行して点火された古代への情熱は, ここ数年また障害児教育の社会史ともいふべき関心となって再燃し, 彫刻の盲目の少女像を追ったりしている。1978年ブランシュヴァイク教育大学が工業大学に併合されるまえの73年, かなり早い時期にかれは東西両ドイツの地理教科書にみる「ドイツ問題」を手がけた。その後, 18世紀古典期のドイツ教育学に接近し, 70年代はフレーベル, 80年代はペスタロッチに照準をあわせた論著を出している。これらにみえるかれの研究手法の特色は, 該博にして厳正, 資料への徹底性というドイツ史学の面目であろう。ことに, 『ペスタロッチとその時代の性』(Pestalozzi und die Sexualität seines Zeitalters, 1987)は, 以前に筆者も紹介したが, 性と犯罪への主題関心と社会史的方法において哲学から歴史へ, 道徳から社会心性へ, さらにマニュスクリプトの比較分析, 図像の収集と分析など, 教育研究の分岐点に位置している⁸⁾。

ホーフには正統派教育学への継承性はさほど多くないし, それへの期待もまた高くない。かれにあるのは, 方法としての徹底的な調査, ことに図像, 彫刻への注視, 主題としての性, なかんづく

